

ながさき異聞

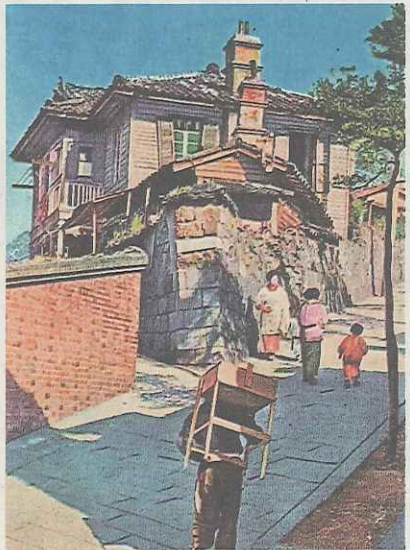
ブライアン・パークガフー

62

孔子廟びやうの裏の斜面には、「東山手洋風住宅群」と呼ばれる7棟の木造洋風住宅が軒を並べ、入り口の説明板によると、住宅群は明治20年代後半に外国人に貸すために建設され、昭和54（1979）年に長崎市が購入して半解体修理工事を実施したという。4棟は資料館として公開されているが、竣工から120年の間に誰がここに住んでいたかについての資料は展示されていないし、外から見れば建物は美しく保存されているものの、中に

入ると部屋はガラシとして静まりかえっているのが現状である。明治期の英字新聞などから、東山手洋風住宅群は元々「片岡住宅」と呼ばれていたことが分かる。日本語の資料に「片岡貸家」の表記が初めて登場するのは、長崎県が毎年発行していた在住外国人名簿の明治30（1897）年版であり、このころか

戦後の絵はがきにみる片岡住宅（筆者蔵）



片岡住宅の昨今

活用待たれる歴史遺産

ロシア人家族を中心に多くの外国人が入居していたようだ。住宅群の建設主について確証はないが、相生町の片岡商店と思われる。創業者の片岡与次右衛門は、四番崩れによる流配から浦上へ帰還した元潜伏キリシタン。明治初年、居留地に隣接する相生町で開業し、外国人に食肉など生鮮食料品を販売した。日本人として最初といわれるパン工場を商店に併設し、イギリス海軍御用達など、外国船舶に食料を供給して大繁盛した。片岡与次右衛門の長男、伊右衛門が明治29（1896）年から家畜の飼育などに使っていた東山手下の斜面を整地し、居留地の住居不足を補うために数

軒の洋風賃貸用住宅を建てた。ロシア人医師で政治活動家のニコライ・ラッセルやオランダ人美術商J・M・サンダーズなど少数の人々以外は、誰が片岡住宅に入居していたかは不明。長崎港に入港する外国船舶の数が激減する昭和初期に片岡商店が看板を下ろし、洋風住宅群を売却したようだ。太平洋戦争後は日本人家族が入居し、建物は古びた雑居アパートと化した。現在、元住民の記憶は歴史の闇に消えたが、貴重な歴史遺産である住宅群は過ぎ去った時代の物語をささやきつつ、新たな活用方法を待ち続けている。

（長崎総合科学大教授）